

平成16年10月30日（土） 酒田市総合文化センター大ホール

クロマツシンポジウム パネルディスカッション

「庄内海岸砂防林の明日を語る」

コーディネーター 中島 勇喜（山形大学農学部教授）
パネラー 呉 尚浩（東北公益文科大学講師）
梅津 勘一（庄内総合支庁森林整備課公益の森整備専門員）
大川能里子（酒田市立十坂小学校教頭）
伊藤美代子（遊佐森林組合業務主任）
三沢 英一（万里の松原に親しむ会会長）
砂山 弘（特定非営利活動法人庄内海岸のクロマツ林をたたえる会理事長）

（司会 高橋）

今日のテーマは「庄内海岸砂防林の明日を語る」と題しております。明日というのは未来への第一日目であります。これから私たちは何をどのようにしたらよいのか、みなさんと一緒に考えましょう。それでは進行につきましてはコーディネーターの中島勇喜先生にお願いしたいと思います。

（C 中島）

山形大学の中島です。よろしくお願いいたします。

先に元気のいい子供さん達の発表がありましたので、負けないように頑張っていきたいと思えます。6名のパネラーの方々がおられますが、この方々はそれぞれ異なった立場で、この庄内の砂防林についていろいろ活躍をしておられる方です。この6名の方々から今日は、庄内海岸砂防林の明日についてお話をいただきたいと思っております。

庄内地方というのは山形県でも海に面している唯一の地方ですが、海岸林が非常に大きいということが一つの特徴ですね。調べてみましたら砂丘自体が非常に大きいということ、そしてその砂丘自体が1,000haを超える海岸林によって覆われていることですね。山形県の海岸林1kmあたりの海岸林面積というのは、北海道を除きますと全国1位の面積であります。それほど大きな海岸林があるということで、さきほどの事例発表にもありましたように、いろいろな歴史、それから海岸林を守ろうという取り組みも行われている訳です。最初に、もう一度振り返って海岸林の歴史について、簡単に梅津さんのほうからご紹介をお願いしたいと思います。

（P 梅津）

私の方から簡単に庄内砂丘の海岸林の歴史的な背景についてお話ししたいと思います。今の庄内の人達にとって、クロマツ林は当たり前のようにあるわけですが、これは実は人が作ったものだという認識が無くなってきています。この庄内砂丘の海岸林はわずか300年の歴史しかありません。300年と言いますと長い感じがしますが、森林生態系としてみた場合300年は非常に若い数字です。しかも、黒松の一斉林は、松くい虫や台風などで一斉に壊滅してしまう恐れがある大変弱い存在です。

そもそも4、500年前までの庄内砂丘は、今のようなマツではなく、ナラやカシワ、イタヤカエデ等の広葉樹で覆われていた時があると言われていています。ところが戦国時代、1600年代ですが戦乱による伐採だけでなく、年貢として住民に塩を収めさせたといひます。地元の人はずこぞて釜で海水をゆで、その燃料として大量の薪を使った。想像を絶するよな薪を消費し、海岸で拾う流木や伐採できる木がなくなつて、最上川や赤川の上流から「塩木」と呼んだ薪を船運で運んだといひ事例があります。植生が破壊された砂丘は砂を吹き上げ、暮らしや農業行き詰つてしまつた。

自然の猛威、飛砂の被害を防ぐためにはもう一度砂丘に森を取り戻すしかなく、そう考へた昔の人々が木を植へ始めたのです。最初から松林を作ろうと思つたわけではありませぬ。佐藤藤蔵等の先覚者も、様々な木を植へてみて最後にクロマツにたどりつた。ですからクロマツが植へ始められたのは1700年代の後半からです。このよなにして作られてきた砂防林ですが、幾多の危機を迎えながら今に至つています。明治期、第二世界大戦時に大きく破壊され、現在は、松くい虫や雪害、そして手入不足。今は第三第四の危機といひ状況にあります。

一番大きく変わったことは生活様式です。昔は松葉さらひ、枯れ枝取りなどが生活の一部としてあり、燃料等の生活の糧を得るとことと、松林を管理することが表裏一体関係でした。それが燃料革命後、そういった管理の仕組みが崩壊してしまつたことが手入不足の一番大きな原因です。

それから庄内には、砂防林を作つてきた多くの先覚者がいます。例えば西遊佐地区には佐藤藤蔵、十坂地区には佐藤太郎右衛門といひ人がいます。ところが酒田の人は、今の砂丘のクロマツは本間光丘さんが全て植へたと勘違ひしている方が非常に多い。本当はもつといろんな人が植林の指導をしてきたのであつて、しかも今我々が目にしているクロマツは、ほとんどが戦後に植へられたものであるといひこと、こういった事実をもつと知るべきだと思ひます。

(C 中島)

どうもありがとうございます。今お話しいただきましたよな、私達の目の前にありますクロマツ林は、私達の生活と非常に深い関わりを持ちながら作られてきたといひことが言えるかと思ひます。文化は「カルチャー」と言ひますが、耕す「カルティベート」からきた言葉と聞ひています。そういう面では、庄内のクロマツ林は、文化財的な遺産と呼んでいいのではないでしようか。

引き続きですが梅津さんの方から、現在の海岸林が抱へている問題、課題についてもう少し詳しく教へていただきたいと思ひます。

(P 梅津)

今海岸林が抱へる問題は第一番に松くい虫です。今33キロの砂丘地は何とか守られています。しかし、今日は秋田県から参加されている方もおり失礼な言ひ方になりますが、我々行政、森林組合そして地元の人達が、2、3年手を抜けば、秋田県南部の海岸と同じよなに壊滅してしまつたろつといひことは明らかです。松くい虫に関しては断固とした決意をもつて対処し続けなければなりません。

次の問題としましては、砂丘地の自然が変わつてきていることです。かつては、白砂青松といひことで、どこでも自由に歩けるきれいな松林だった。しかし今はヤブじゃないかといひことです。確かにヤブなわけですが別の見方もできるわけです。昔は松葉をさらひ続けたため、砂地に土壌がでせなかつた。しかしこの数十年ほつたらかしたおかげで、沢山の落ち葉が積もり、それが腐つて腐葉土になつています。肥料分のない砂地の上に土ができてきている。わずか数センチ。

砂地の上に土壌ができてきたことよな植生が変わつてきました。遠くから見るとクロマツ林ですが、1歩中に入ると、300年前は想像もでせなかつたよな多種多様な樹木や草が侵入してきています。

もう一つ大きな問題はニセアカシアです。これは北米原産のマメ科の植物で、かつての砂防植林時に肥料木として導入されましたが、ものすごい繁殖力があります。1年で2m、3mも成長し、他の樹木、特にクロマツを脅かす存在となり、これの駆除が大きな課題となっています。

最後の課題としてはバイオマスです。昔であれば、枯木があればみな燃料にしていたのですが、今は誰も薪にしようとする人はいない。松くい虫被害木等をどう処理するか、ということが今の大きな課題です。せっかく何十年も生きてきたマツを、廃棄物としてお金をかけて燃やしたのでは、ただ地球温暖化に拍車をかけることに他なりません。ですから今は、パルプやペレットの原料として極力利用するようにしています。そういった有効利用があれば枯木も非常に大きな資源、エネルギー源になりうる。庄内砂丘33キロ2500haの松林は、そういう意味では、大変な可能性を秘めていると言えるかもしれません。

(C 中島)

ただ今、海岸林の現状についてお話いただいたわけですが、松くい虫、それから植生遷移と言いますが、クロマツ林から別の広葉樹樹林へと変わっていく問題ですね。それからその中でも特にニセアカシアが問題だというお話がありました。それからバイオマスとして利用するということで、松くい虫で枯れたりしても、それを処分する場がないとどうしようもないです。循環していかないと正常な林が生まれてこない背景があります。

次に、遊佐森林組合の伊藤さんからは、現場で森林組合が携わっている海岸林の状況、その仕事の状況や困難さについてお話し頂きたいと思います。

(P 伊藤)

遊佐森林組合の伊藤です。今、梅津さんよりお話し頂いたように、実際に依頼されて現場で仕事を行っております。一番大変なのが1つは調査の段階で、実際それが松くい虫なのか、それとも塩害なのか、それとも他の要素で赤くなっているものなのか、判別しにくい状況になってきており、現状での調査では判断が大変しにくくなってきています。

作業に入っても、だいぶ何年も前から作業を行っているのですが、だんだん現場が奥に入り込んできており、現場に道路が無い為作業がしにくくなっております。また伐採した松を搬出する段階においても、一輪車を使っての人海作業になっていて上手く出せない状況で、また最後に搬出した松を置く場所がなく、作業が困難な状況になっております。

そんな中においても、まわりのみなさんに松くい虫の被害が周知されるようになり、みなさんに協力して頂く様になり、有り難く思っております。それと同時に残っている松林をこれからどうやって残して維持して行くか、また松を切って空いている土地をどうやって保全していくか。私のところでは、広葉樹があった場合に迂回してでも残していくように徹底しております。松だけでなくその他のいろんな広葉樹や植物をこれから生かして、この砂丘地を守っていかねばならないのかと思っております。

(C 中島)

ありがとうございます。最近の台風15号による影響により、塩害なのか、松くい虫による枯損なのか非常にわかりにくい状況です。

それから、大径木で重量があるものは、道路が無いと出せない状況でありますので、道路整備も含めた森林の整備が重要だご指摘があったとおもいます。

それでは話題をかえまして、砂防林の維持管理をする人がいなくなったと御指摘がありましたが、直接地域で砂防林の維持に携わっている三沢さんより、「万里の松原に親しむ会」で取り組んで活

動されている事についてお話しを伺いたいと思います。

(P 三沢)

万里の松原に親しむ会の三沢です。私どもは本間家や、当時平田郷の尾形家等で植林をした「万里の松原」の地域を、主な活動フィールドにして活動しています。戦後大変な努力をして海岸に植林が行われたのですが、そうゆう海岸林に守られて生活をしているのでございます。さらに「万里の松原」といわれている地域のクロマツ林は、その多くが都市公園、あるいは市民が親しむ空間として、酒田市と当時の酒田営林署が協力をして整備をしていただきました。

そんないろいろな形で恩恵を受けている地域の者として、何らかの活動ができないものかと、植えばなしで手入不足の花木の手入れや下草刈りができないものかと、地域の者が集まって5年前に発足いたしました。

おもな活動のフィールドは国有林です。国有林での活動については、当時の営林署側では慎重でしたが、その後、お互いに遺志疎通ができ、信頼が深まって良好な関係の中で仕事をさせて頂いています。

最初は少しの汗を流そうと始めたのですが、始めてみますと、仕事は無制限にあるわけです。

万里の松原は全体で130ha、そのうち松陵地区がその半分の60haあります。私達約80数人の会員がいますが、1回の作業に参加する会員は30人前後で、作業をこなす量は極めて限定されますが、それでも30人の大人が男も女も力を合わせてやれば、それなりに一定の仕事が出来ると言うことを、毎回の仕事を通して実感しています。

しかも潮害防備保安林であります「万里の松原」での仕事は、保安林の機能を維持しながら、さらに市民の憩いの場でもある空間をより快適な場として整備していくという、二つの目標を同時に達成し、その恩恵を直ちに享受する。このような事で、最近では会員から悲鳴があがるほどの仕事があります。しかし、またやろうとうと言えば、またたくさんの会員が集うような、そういう状況になってきています。

最初の作業は、せん定と下刈りから始まったのですが、木が枯れて空き地になっている所には木を植えようと、市の方から市制70周年記念として、継続して仕事をやってみないかと言われて、それでは私達だけでなく地域の子供たちと一緒に仕事を持続しようという事で、泉小、松陵小、一中、五中、中央高校、この5校の学校と集まって、「万里の松原学校連絡会」を立ち上げました。

そして、その活動の拠点として、万里の松原の一角に、庄内森林管理署の理解のもとで「自然観察教育林」という地域を設定し、そこに植樹し、下刈りをし、そして自然体験をしよう、という活動をしております。まだ3年あまりではありませんが、先日五中の子供達が、万里の松原で拾ったクルミから芽を出して苗に育て、それを森に返す植樹をつい最近行いました。子供達と一緒に学びながら活動することをスタンスにしながら、ようやく4年目を迎えました。活動状況は最近の会報を配りましたので、現在の到達点として見て参考にして頂くとわかって頂けるとおもいます。

(C 中島)

どうもありがとうございました。子供たちと一緒に松原の活動に取り組んでいる「万里の松原に親しむ会」の活動については、また後でご発言いただきたいと思います。

次にボランティア団体でも、地域を越えて活動しようとしております、この会の主催者でもあります「庄内海岸のクロマツ林をたたえる会」の砂山さんから、会の立ち上げなども含めて、取り組んでおられる活動についてお話をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

(P 砂山)

私どもの名前は「庄内海岸クロマツ林をたたえる会」です。みなさん1回で覚えられますか。こんな長くてわかりづらい名前を付けるということで、いろんな議論があったのが私たちの設立時の経過の一番の問題でした。この会が平成13年11月に立ち上がるまで、先ほど表彰を受けました桜井前会長が3年の準備期間を費やしたんですね。その桜井前会長がどうしても「庄内海岸のクロマツ林をたたえる会」にしてほしいと言うんですね。確かに私たち設立時には、今どき1回で覚えられないような名前じゃどうしようもないんじゃないの、一般市民の方はコマーシャルじゃないけど、すぐ頭に入る名前がいいんじゃないのと言ったんです。それで何回か話した中で、桜井前会長はやむを得ないと一度は引込めたわけです。けれども、今私たちが略称で使っています「クロマツの会」に決まりかけ、会が発足する間際になってから桜井前会長から、自分としては「庄内海岸のクロマツ林をたたえる会」の名前でなければいけないと、そういうことがあったわけです。

やはり、3年の歳月を費やして準備されたのだからそれが正しいだろうと、そういうことで今の名前にした訳です。それから3年、我々も活動してきて振り返ってみると、この名前が本当に我々の会の活動理念を表しているのだなとつくづく思っております。と申しますのも、庄内海岸というのは、先ほども申しましたように33キロあり、幅も3キロほどある、広大な砂丘なわけで、我々クロマツの会だけでは対処し難いわけですが、今、たくさんの団体が一生懸命取り組んでおられる、そういうふうに痛感しております。

ただ今お話ありました、「万里の松原に親しむ会」、それから「山王森の緑を育てる会」、「飯森山の緑と景観を考える会」、遊佐地区にいきますと「砂丘地砂防林環境整備推進協議会」、若干離れていますけれども三瀬にいきますと、「森の人講座実行委員会」。こんなふうに広い砂防林でございませうけれども、各地域に砂防林を守らなくてはならないという方々が着実に増えているわけです。

我々の会は、33キロを守るにはそういう方々とチームワークを組んでいこうと、そのコーディネーター役ではないかと、それに徹することが使命であると、そんな役割を痛感しております。

それからもう一つ、「たたえる」という言葉を使っていますけれども、最初はちょっと馴染まなかったのです。しかし、いろいろ活動しまして、平成14年には「クロマツ講座」を4回、平成15年には「庄内クロマツ大学」を5回。今年に入ってから9月に「庄内砂丘歴史探訪」などの研修をやりました。こういう講座や研修をやるたびに思うのは、我々がいかにクロマツについて知らなかったか、研修とか講座とかに参加するたびに学ぶことがあまりにもありすぎる。やっぱり我々の会がクロマツについて啓発の仕事をするのが非常に大事なことだと痛感しております。

特に先日ありました、「庄内砂丘歴史探訪」。先生はここにおります梅津さんにいただきました。その時の研修は、先人がたたえられている石碑をまず訪ねよう、ということで回ったわけです。当然その中には、本間光丘、佐藤藤蔵、佐藤太郎右衛門等、偉大な先人の石碑があります。しかしその探訪の中で我々びっくりしたんですね、各部落各部落に砂に埋もれ、陰に隠れている名前も知らない多くの先人がいたわけです。偉大な先人はわれわれ知っていますけれども、その村その村にいた先人を知らなかったことは大変残念なことでもあります。そういう先人をたたえる事だと思えます。我々がたたえる会をやっていくことが仕事であり、3年やってきてそう思いました。これからも皆で勉強していきたいと思えます。

(C 中島)

どうもありがとうございました。庄内でもいろんなボランティア団体が立ち上がっていますが、そんなボランティアのコーディネーターとしての役割をNPOとして担って行きたいという話でした。

次に今度は海岸林を使った教育に話題を振って行きたいと思えます。大川先生にお話し頂きたいと思えます。大川先生は西遊佐小学校、十坂小学校と2つの小学校で砂防林の保全活動や、砂防林

を学習の場として指導されています。小学校児童の学習の取り組み方で、困難もあると思いますし、楽しさもあると思いますのでその事についてお話し頂きたいと思います。

(P 大川)

先ほど、私がかかりました遊佐町立西遊佐小学校と、現在かかわっている酒田市立十坂小学校の事例発表がありましたので、内容については詳しくはお話し申し上げます。

教育現場で総合的学習が誕生しまして3年目に入りました。総合的学習とは、それまでの教室の中の座学から、もっと子供達を外に出して、自然体験やボランティア活動を通して、子供達が生きた勉強をする、自分達の生活の本題を見つめてこれからも回り続ける、そういう子供達を育てていかなければ、ということからスタートしました。

3年生以上ということで、その学校その学校で、地域の課題を選んで取り組んでいるのです。その中で、西遊佐小も十坂小も、庄内地方の多くの小学校も、松林が現風景として子供達の中に入っているのではないかと思います。私の中にも子供の頃から松林があると思っています。

皆さんがお話しになりましたが、環境問題、環境教育というところに大きく視点を置いて、総合的学習にそれぞれの学校で取り組んだ時に、黙っていても西遊佐小も十坂小も、子供達の周りにあるクロマツに視線が行くのは当然の事だと思いますが、どちらにしても仕掛けなければ見えてこない。そういう仕掛けをしてくれたのが、地域であれば藤崎の区長さん、こちらでは梅津さん、その方達が仕掛けてくれて初めて、先生達と子供達が一緒にやりたいな～、やらなければ、ということからスタートいたしました。

教育ですので、何を？と思いますが、そこで得る感動や驚き、そういったものが子供達には非常に新鮮なものではないかと思います。例えば、西遊佐小学習林の鳥海学園を望む高台に立ちますと、素適な爽やかな風が吹いて、その風に当たった時、子供達はいいなあと思うわけですね。

こういう思いは、大人よりも柔らかな感性の子供達の中には、すうっと染み込んでいって、その中で、こんなことしていいのかな～、こんなんでいいのかな～、という幼い子供達の疑問とかが発展していって実を結んでいく。それをコーディネートしていくのが担任の先生であり、地域の方達とも結びながら大人も一緒にやって下さる、それが子供達にとって、私達のやっている事は間違っていないという自信につながっていき、将来大きくなってから、そういったことに身を置いて働くこともできるし、夢をもってそこに係わっていくことも出来る大事な場ではないかと思います。

先ほど中島先生から「困難さ」という話がありましたが、私達は辞令一枚であちらこちらを移動しなければいけないので、それを継続させることの困難さがあります。

どの学校に行きましても続けなければいけない、そこが大事な所かもしれません。その為にも、地域の皆さんのご協力があり、応援もあり、ここにいる皆さんのバックアップがあって続けているのではないかと感じています。

楽しさはやればわかる事ですが、例えば一番驚いたのは、枝打ちなんてただの労力だと思っていたのですが、子供達に「どうだった？」と聞いてみますと、「すごく気持ちいい」と、枝打ちして広くなった場所でひっくり返って、大の字になって深呼吸して、「気持ちいいなあ～」と言っていました。その子供は普段は勉強しかしない子だったのに、「うれしいな～」と、そういう話しをしていまして、その感性が大事だと思います。子供が喜べば私達も嬉しいし、そういう場を大切にしていきたいと思うし、なによりもうれしいです。

そういう面で、いろいろな方と係わりながら、将来にわたって大事な松を守り続ける気持ちを、子供達の心の中に育てていけたらいいなと感じています。

(C 中島)

どうもありがとうございました。感動や驚きという言葉が出ましたが、海岸林は山岳地帯の急斜と違いまして、実働的に体験できれば感動や驚きを得やすい場所ではないか、ということが伺われます。また、継続の困難さというお話しにありましたが、先生方は転勤がつきものです。そのため、小学校として継続していくには地域の方とか、いろんな方々との協力なしではやっていけないとの発言がありました。それでは、さきほどご発言がありました三沢さんの方から、万里の松原学校連絡会の中で小、中、高生との取組みをやっていきますのでお話し頂きたいと思えます。

(P 三沢)

今大川先生から、継続していくことの難しさをお話し頂きました。小学校では素晴らしい実践が行われていますが、できればそれが中学校へ、高校へと引き継がれ、植樹をしても、最低義務教育期間ぐらいは手を掛けていかなければいけない事を学ぶ。そういう事を継続実践し体験させていくような教育活動が出来ないものなのかと、私どもが地域の、小、中、高校に伺って先生方と話し合いをさせてもらっています。

それで「万里の松原」周辺の5つの小、中、高校が集まって、意見交換を行う場を設けることを考えました。それぞれの学校はいろいろな活動をしてはいますが、もっと意見交換をし、そして節々に皆で一緒に活動をしてはどうか。そのような提言などもさせていただきました。そして、5つの学校からなる「万里の松原学校連絡会」を立ち上げ、年に2回くらいのペースで、意見交換や今後の活動などについての話し合いをしています。

その1つに、「万里の松原自然観察教育林」の設定があります。国有保安林ですので、多少の制約はありますが、各学校が自由に植栽し、自然体験や環境学習を行える、共通の学習の森を設定し、そこに5年がかりくらいで植えて行こうというものです。先日は、第1段として第五中学校の生徒が、自分達で万里の松原で採取したクルミやドングリから育てた苗木を植樹しました。

このような試みを、それぞれの学校の条件に合わせて無理しないで、しかし粘り強く持続的にやっていくことを一つの活動の柱にしておりますし、各学校の教育活動の中で、積極的に万里の松原を活用していただきたいと思っています。

学校では、子供達の野外活動の機会をつくりたくても、バスを借りることが大変ということで、国土緑化推進機構の助成事業に申請しましたところ認められ、今年、泉小と松陵小でそれぞれ1つの学年ですが、私達が案内して、先人の活動の後を探访しました。本間光丘の業績を記した日和山の「松林銘碑」1つとっても、2つの小学校の子供たちの誰1人見たことがないのが現実でありまして、教育活動をしていくことの大切を学びました。それから現場では、森林管理署の現職の方からも出て頂き、現在の海岸林整備の状況の説明なども頂きました。このような活動をするためには、私どもの会員自身ももっと知識をもたなければなりませんし、土曜、日曜日に先生方からもきていただいて、事前視察や調査をし、資料作成の打合せをするなど、協力して準備をしました。

また、先ほど中央高校の事例発表がありました。同じように第一中学校や第五中学校でも学年を挙げての活動が行われるようになりました。小学校でもそれぞれ活発な総合的学習を進めており、万里の松原をテーマにした児童の発表を聞くと、逆に私達の方が啓発を受ける状態であります。

庄内総合支庁の梅津さん達が、鶴岡から遊佐までの全ての学校の面倒を見ることは、実際には困難ですし、私ども地域の者ができることをお手伝いしながら、あるいは地域の者自身が学びながら、この地域の学校教育を充実させていくために先生方と力をあわせていく。そういうことが、この海岸砂防林を地域で守っていく活動を発展させていく上で、一番基本的な力になるのではないかと最近考えています。万里の松原の親しむ会の大きな活動の柱になってきています。

それから、先ほどの中央高校の発表で説明がなかったことに、中央高校の美術部の生徒たちには、樹木の名前を書いた杭をつくってもらったり、森の音楽祭を開催する時の看板を書いてもらったり

という活動をしてもらいました。その音楽祭を開催するために、学校が授業免除でお手伝いの生徒を派遣していただくなど、単に万里の松原の緑を守るというだけでなく、よりよく親しんで、自分たちの森であると実感できるような活動をしていく、そういう活動に少しずつ私たちも手をかけることができる様な状況になってきたのも、子供たちや学校のご協力によって支えられ、あるいは刺激されて行えるのだ、ということで活動状況の報告とさせていただきます。

(C 中島)

小中高生と一緒に活動をする。会員自身が知識を育てていくことが重要だと思います。それから、子供達の感動から私達が啓発を受ける事があります。環境を考えると、環境に親しむことが一番基本になっていくと思います。まずは親しんで、そこから何かを学んでそして守ろうとする意識が生まれてくと思います。それでは、遊佐森林組合の伊藤さんから、森林組合でインターシップの生徒を受け入れていると聞いていますので、その事でお話し頂きたいと思います。

(P 伊藤)

平成9年頃でしたか、職場体験という事で遊佐中学校さんから依頼がありました。その当時、森林組合という職場はあまり知られておらず、働きに来てくださる人もいなくて、中学校の生徒さんに指導すれば職場を解ってもらえるのではないかという下心もあって引き受けました。

引き受けたのは良かったのですが、そのような指導をやった事がなく、どうやったらいいかわからず、当時の庄内支庁さんとかに相談して指導を受けました。毎年受け入れるうちに、だんだん要領も得て、大勢の子供達に作業をしてもらううえでの、いくつか大切な事もわかってきました。

最近では、毎年2百人規模の生徒さんによる、クロマツ林の整備作業が行われるようになりました。たとえば枝打ちのこぎりや下刈り鎌を生徒に渡したとして、私たちの世代では、これで何々してくださいって言えばいいのですが、今の子供たちは、のこぎりや鎌が刃物で危険であるということ体をわかっていません。最初に、これはのこぎりですよ、ここを持って下さい、刃のところを触ると手が切れますよ、そんな当たり前のところから指導していかなければなりません。それは細かいことですがとても大事なことでした。そのおかげで、今までカットバン1つですむ位で大きな事故を起こさずにきたのです。

実際に仕事をしてもらう前に、学校で事前学習もしてもらうのですが、実際現場でどういう風にしてもらいたいのか、私たちが事前に1つの出来上がりというか、見本区を準備して見てもらうことも大事なことでした。いきなりやぶの現場に連れて行って、じゃあ枝打ちを始めてくださいといっても、どうやったらいいかわからず、もそもそして作業になりません。毎回、1度もやったことがない子供たちが来るので、最後にはこういう形になるんだという見本区を見せて、それから中に入ってもらいます。

それから仕事をしてもらう上で、わからないことは自分勝手に判断しないでもらいたいということ。切っていいのか悪いのか、疑問が頭に浮かんだらとにかく聞いてくださいということ。とにかく切ってしまったものは元には戻せないということです。

そして細かいことですが、例えば切った枝を道路に出す時、枝のどこを持って運び、どの方向に向けて置くというかというところまできちんと指示を出します。そうしないと、後の作業がどれだけ大変になるか、次の作業を考えた作業の方法というものを理解してもらいます。

それからやっぱり大勢いる中では、ふざけてしまう子が中にはいます。そういう子は思い切り怒って、その場から出て行ってもらう、或いは、バスから戻ってくるな、という断固とした態度をとります。と、いうのはのこぎり1つにしてもこれは刃物です。振り回したりした場合、自分が怪我をしなくても、周りの人に怪我を負わせる場合もあります。ですからこういう作業をする場合は、

ふざけてはいけないということをわかってもらう。ふざけたらそこから出て行ってもらうか、動かないでもらうという断固とした態度が大事でした。そのおかげで、今まで事故で救急車呼ぶこともなくこられました。子供たちを預かるということは、そのまま無傷で返すということが最大条件だと思います。

そういうことに気を遣って今までやってきましたが、それと同時に、指導する我々のレベルアップも大事だなと思いました。我々指導する人が、聞かれてもわからない、どうしたらいいかわからない、そういうことでは、聞く方も困るというか、現場もめっちゃくちゃになりますよね？

今まで経験してきたことを積み重ねた毅然とした態度、それから現場での作業は、最後はこういう仕上がりにするのだ、という細かい所まで子供たちに教えるということ、そういうことを踏まえてインターンシップをこれからも引き受けていきたいと思いますし、子供たちに対して、その厳しい中においても森林というものを知ってもらい、その大切さ、すばらしさ、そこに働く人々の思いや喜び、そういうものを理解してもらいたいと思います。

(C 中島)

ありがとうございました。楽屋での打合わせでは、発言は1人3分以内ということでしたが、やはり実際に現場で携わっている深い情熱がひしひしと伝わってくるようで、もっと聞きたいぐらいでしたが、申し訳ありませんが止めさせていただきました。

今までのお話を聞いていますと、私たちが砂防林を育てている気持ちではいるのですが、実は砂防林から私たちがいろんなことを学び、私たちが砂防林から育てられているのではないかと、という印象を今受けました。

こうして庄内では、砂防林を通してボランティア活動とか普及活動が活発化してきているわけですが、公益大の呉先生から、このような活動の全国的な傾向とか、あるいは庄内の活動の特徴などをお話いただきたいと思います。大変長らくお待たせしました。

(P 呉)

今日は、大変歴史的な日であると思います。1998年11月に、一晩で40cmもの湿った雪が降り、大きな雪害が起きました。その事がきっかけではじまった動きが、ようやく7年目に入ります。その間、いろいろな会が開催されてきましたが、市民グループが主催したところに、県や市、教育機関、森林組合などの多くの団体が協力し、手弁当で開催する会は、今回初めてです。

また同時に、この長い300年の歴史の中で、この鶴岡から遊佐、そして県内外から広く砂防林に思いを寄せる方々が集まったということも、おそらく初めてではないかと思います。そういった意味で、今日は歴史な日であるわけです。

さて、まず私が最初に庄内の海岸林に出会って感じたことは、人が住んでいる近くの松林が、砂防林ということで、現役の里山として今なお活躍しているということです。今日、埼玉県からトトロのふるさと財団の方もお見えですが、経済的に役割の減少してきた森林を、東京とか都会の中で残すことは本当に大変なことといえます。

先ほど砂山さんに、いろいろな会のことを挙げて頂きましたが、庄内にはさまざまなタイプの市民・住民活動があります。遊佐町の砂丘地砂防林環境整備推進協議会は、農家の方たちが区長さんたちを中心にまとまっている地縁コミュニティ型の団体です。それに対して、「万里の松原に親しむ会」「飯森山の緑と景観を考える会」「山王森の緑を育てる会」などは、それぞれの森の周辺の人たちが、地域の義務で参加する訳でなく、趣旨に賛同して参加し、本当に緑が好きな方々が地域の緑を守っていく地域NPOタイプの活動です。そして「庄内海岸のクロマツ林をたたえる会」は、庄内全体を視野に入れての研修会や講座を開き、広域型NPOとして、大きな視点でさまざまな市

民グループと協働しています。

その中で、庄内で最も特徴的なことの一つは、教育機関独自の取り組みや、市民活動と教育機関との連携です。本日、子供たちの素晴らしい発表がありました。だいたいこのような会は、偉い先生をお呼びして基調講演をしたりしますが、この会は、まず子供たちが基調講演をしたという点が大変素晴らしいと思います。庄内においては、ひとつの学校が頑張るのではなく、いくつもの学校が連携して関係ができていくという点は、全国でも大変新しい試みです。

最後に、最も私が強調したいのは、このチラシを見て頂きますと、「協力」として「出羽庄内公益の森づくりを考える会」とあります。この会は、国・県・市町村の行政機関、NPO や市民・地域グループ、小・中・高の教育機関、森林組合などの林業関係団体を含めて、30ほどの団体が、年に3回ほどの大きな会議を開いています。同じテーブルに座って砂防林の今後のあり方について話をするだけではなく、現場でも日々協力し合い、現場から発想していこうと、現場を共に歩き、いろいろな視点でこの庄内の公益の森づくりを考えています。こういう試みはいくつかあると思いますが、これだけ内容が実質的で、広範囲な参加者間で仲が良いという会は、他の地域に類をみないのではないのでしょうか。

今日のパネラーの方々も、私は立場上こういう役職なのだけれども、私人としてはこう思うし、こう語りたいたいという方ばかりです。1人1人が、人間的なお付き合いの中から、森を守ろうという熱い気持ちでいるのがこの会です。

(C 中島)

ありがとうございました。

「出羽庄内公益の森づくりを考える会」ですが、そこでは色んな方々が同一テーブルで、砂防林の今後についてどうしようということ話し合う、そしてまた指導していく。

私は日本海岸学会の会長をやっていますけども、そういう事例は全国どこにもなく、庄内ではじめて出来上がった。こういう事例をほかの所でも広めていただきたいですし、庄内ではこのような精神的な形でそういった活動が行われているわけです。

今は事務局などを、県の庄内総合支庁にかなりおんぶに抱っこされた形で動いている部分が正直言っていますが、いずれはやはり、今日のこのシンポジウムを主催されました、「NPO 庄内海岸のクロマツ林をたたえる会」、その辺りが力をつけていただいて、色んなボランティア団体や関係者、地元の方々などと連帯させる活動を、是非そういう力をつけていただきたいと思います。どうでしょうかね砂山さん。

(P 砂山)

大変期待していただいて有難いのですが、やはり現在の多くのNPO、こういう環境関係だけでなく、1番は今活躍していると思われるお年寄りの介護など。その全部に共通しているものが、組織体制と財政基盤の確立です。それをやるためには、認証をもらったからOKじゃなくて、認証をもらった時から、組織体制と財政基盤の確立に向けてよーいどんと思われたいです。やはり3年、5年はすぐたちますね。ですから、これからしばらくの間は、行政の皆さんや、色んな企業の皆さんから指導して頂くということを踏まえながらやっていきたいと思っています。

また、今日私が提案する予定の大会決議の最初の方でも申し上げますが、行政、森林組合、森林所有者、生産団体などが、こういう問題についての柱であり、我々はそれを支える土台になっていこうと、そんな気がしております。

そんな事で若干時間がかかると思いますが、NPOなら何でも出来るじゃなくて、皆様共々一緒に勉強していきますのでよろしくお願ひしたいと思ひます。

(C 中島)

ありがとうございます。土台になるという発言でしたけれども、活動を益々活発にさせていただきたいと思ったり、クロマツの会の活動をみんなで見守っていきたく思います。

それではパネラーの皆様に一応一通りお話を頂きましたが、あとはそれこそ砂防林の明日へむけてということで、各パネラーの方々から明日を、砂防林の夢を、困難さも含めて結構ですのでご自由にお話いただきたいと思います。それではまず大川先生の方からよろしくをお願いします。

(P 大川)

今私は仕事柄、地域の方々とも、子供とも、保護者とも関われる立場です。今十坂小でこういう動きがあります。スタートは梅津さんでした。最初はPTAの方が動きました。そして、子供が動きました、そして地域を巻き込みました。そしてしばらくお休みがありました。

そして今、また動き出しています。PTAの皆さんがこのままではいけないと思い始めています。PTA会長さんがこんなことしてられない、学習林をこのままにしておくのか、よしやろうと、PTAの皆さんもやろうとってくれました。毎年学習林を整備する日を決めました。7月の最後の日曜日にやりましょうと決めました。

やっと少し動いたなと思っておりましたら、ここにおります佐藤丈晴さんが、3学年PTA行事として、親子で一緒に歩いてみようと、学区内の黒松林を歩いてくれました。

こんな風に少しずつ、少しずつ、子供の活動が地域に広がり、地域の年配の方だけでなく、若いお母さんやお父さんの世代がそうやって動いてくださるということは、未来につなぐ大事な活動だなと思います。私の立場でも、是非PTAの皆さんを巻き込んで運動を続けていきたいなと思います。

(C 中島)

ありがとうございます。子供が動けば大人も動くということでした。「大人が変われば子供も変わる」という標語がありましたけれども、まさにここでは「子供が動けば大人も動く」という、子供さんに色々動いてもらうということは、私たちも一緒に動かないといけないような形になっているかと思ったり。是非、海岸林の活動をPTAの方々と一緒に、また、総合学習の中で、制約のある中でしょうけれども、ご活躍をお願いしたいと思います。それでは伊藤さんの方からお願いいたします。

(P 伊藤)

遊佐の方においても、西遊佐小学校や稲川小学校で、益々地域に根ざした、地域を巻き込んだ活動が広がっていけばいいなと思っています。その場合要請があれば、こちらでも出来る限りのことをしていきたいなと思っています。その活動が広がることによって、遊佐の西山というか砂丘地帯も、私たちが小さい頃に覚えているきれいな、それこそ散歩したりきのご採ったり、山桜を見たり、そんなことが出来るきれいな山になればいいなという思いです。

(C 中島)

ありがとうございます。それでは三沢さんをお願いします。

(P 三沢)

活動を継続するためには、目標を持ち続けるということが絶対大事だと思っています。最近、会

員や地域の皆様からは、いろんな夢が語られるようになりました。私たちは親しみということが大事だと考えていますが、その中で、皆に万里の松原を知ってほしいということでマップを作るといいう仕事をしています。来年にはでかしたいということで、私たちがつくった原案を、市の方に見せてご協力をお願いしました。

そしてそのマップは、松林の重要性だけでなく、酒田の歴史を語るということも1つのねらいです。実は、万里の松原の真ん中を奥の細道、いわゆる旧秋田街道が通っています。そういうことも是非、もう1度知っていただこうと思っております。また、そのための看板なども、私たちの仕事の中で作ろうと思って準備しております。

それから、私たち会員だけが特別な人達という形ではだめですので、みんなから親んでもらうために、私たちの作業基地であると共に、市民とのふれあいのセンターを作ろうということで、みんなで労力奉仕するので、材料をなんとか協力してくれないかと、行政の方と相談しています。

当然国有林ですから、森林管理署さんの理解と協力が前提になりますが、色々作業用器材も増えてきていますし、それを保管管理する場所も必要です。このような我々の作業基地、そして何よりもふれあい、親しめるセンターとして、そういうものを手作りで作りあげていきたいと考えております。

そして今、これは酒田市の色々な団体で協力し合いながらであります、森林セラピー基地を作ろうという構想もあります。万里の松原にも温泉が出ましたので、森林浴と足浴で健康をつくろうと。有力な競争相手は、秋田県能代市の「風の松原」であります、万里の松原を、人生80年時代にふさわしい良い環境作りに、私たちも汗を流していこうと、ここに出席しているたくさんの方々には是非色々ご協力頂きたいと思っております。

それから長くなりましたけれども、もう1つは会員自身の活動の質、量をもう少しレベルアップしたいということです。森林管理署の協力を得ながら、海岸の第一線の国有林の手入れについて、具体的な協力をできないだろうか、という議論も会員側からでてきます。

そして最後ですが、今回の台風で万里の松原も相当やられました。その再生に向けて、今まで私達地域の者は、ただ行政をお願いするだけでしたが、今回は、どういう形でやられたところを再生していくかということ、隣接する自治会の皆さん、住民の皆さんからも現場に集まっていただいて、森林管理署の方々とともに現場で話しあって素案を作り、皆でその再生にむけて整備していこうということになっています。また、造園業者の方も一緒にしていこうという話をしています。

その場合一番問題なのは、植えっ放しではダメだということ。維持管理にどう地域の方が関わっていくのか、そういうことについて私たち自身の責任が問われます。そういう問題とも向き合って、行政の方々と地域の皆様のご協力を得ながら、自分たちでより良い環境を作っていこうと、台風被害再生のための仕事をやることになったことは、私たちの会にとってこれは大きな1歩ではないかと思っております。

(C 中島)

どうもありがとうございました。温泉場ということですが、それはいつから使われているのでしょうか？

(P 三沢)

新しくできた温水プール脇にできた足湯ですが、現在夜11時くらいまで足浴の人で満杯で、反響を呼んでいます。今も2キロコース4キロコースなどの歩道の設定はありますが、例えば、足湯を基点に5キロコース10キロコースを設定して、万里の松原を散策して十分に森林浴をする。そして歩いたあとに足浴で足の疲れを癒す。これは人生85年の時代にふさわしいのではないかと思います。

いますし、町の中そういう場所がある事はすごい事だと自負しながら、行政の方々にもお願いして、ぜひ実現したいと思っています。

(C 中島)

今日は秋田の方もお見えですが、競争相手ということでどうぞ頑張ってもらいたいと思っています。それから、植えたばかりではダメだということもあったと思います。植えることは比較的簡単で誰にでも出来ることですが、それをどう維持管理して行くかが一番大変なことで、その事が大きな問題になっていると思います。

私は学生さんにいつも「植えたあなたの責任最後まで」と言っています。人間の生き様も含めてそう事を言っています。維持管理して最後まで責任を持つ事が大事だと思っています。それでは梅津さんにも長らくお待たせしたのですがお願いしたいと思っています。

(P 梅津)

海岸砂防林の土地所有は、八間山六間山という地名があるとおり、ものすごく細かいのです。

森林所有者が自分の山を手入しようとしても、それ以前の問題として自分の山がどこにあるか分からない、境が分からないということが現在の大きな問題です。

したがってこれからは、誰彼の山というのではなく、地域の共有財産として皆で守ろうとする意識が大事だと思います。この写真は、平成10年雪害の翌春に十坂小で植林した現場で、十坂小の活動のルーツです。この狭い土地でさえも、宮野浦の3名の所有者がいます。その頃私がPTAの役員をしていて、「あなたの土地は保安林ですが木が生えてないので、十坂の子供達に植林の体験をさせたいのですが」と、三人の方にお問い合わせに行きまして、了解を得て十坂小の植林地にして、親子でクロマツを植えました。この写真には、私の次男坊も写っていますが、今この子供達は高校1年生です。大きくなると、「十坂のクロマツ」の活動も忘れ、関心も薄れるかもしれませんが、私はそれでもいいと思います。高校、大学と進むにつれ関心が薄れたとしても、自分達がここで松を植えた記憶は残ると思います。

子供たちには、松の苗は1年間で30cm伸びますよ、10年間では3m、20年間で6m、40年では12mなりますよと語ります。ということは、ここに松を植えた子供達がもう10年20年すれば人の親になります。私が大事だなと思うのは、この庄内砂丘の海岸林を未来に引き継ぐということは、世代を超えて、まだ生まれてこない世代にどうつないでいくかということだと思います。ここで松を植えた子供たちが、PTAになった頃、この場所に立てば、それまで忘れていたとしても思い出しますよね。自分たちが植えた松がこんなに立派な松林になったのかと。

その時、自分の子供に必ず語るはずです。「この松はお父さんたちが小学校の時に植えたんだよ」と。その一言が大事だと思います。その一言がなければしりきれトンボになってしまいます。

ですから今、私たちの活動は一生懸命子供を相手にしています。その子供たちが親の世代になって、その子供に語りかけるまで継続しないとだめだと思います。先ほど大川先生が継続は非常に難しいと言いました。私も公務員で転勤商売ですが、庄内にいる一時だけ一生懸命やればいいのかというものではないと思います。公務員である前に地域住民ですから、地域社会の一員として地域活動としてやっていかなければいけないと思います。

この写真は何だと思いませんか。実はこれ、十坂小の植林地ですが松の先が切られています。子供が植えた松を切る大人がいるということです。庄内はボランティア活動が盛んな、公益の地だと最近よく言われますが、私はそうは思いません。まだまだ公益的な精神というものは行き渡っていないと思います。十坂小植林地と書かれているにも関わらず、子供たちの植えた松を、正月の松飾りにちょうどいいからと切っている。1本や2本ではありません。

十坂だけでなく、遊佐や鶴岡でもそうです。昨年西郷地区で、県事業で植えた松を何十本と切られる被害があり、鶴岡市の広報に出しました。保安林の松を門松用に切らないで下さいと。

昔の庄内では門松はなかったといえます。それほど松を大事にしていた。しかし今は、一生懸命勉強して松を育てる子供もいれば、それを切る大人もいるということも厳然たる事実です。

実は明日31日、「砂防林を育てよう」という5年目になるボランティア活動がここにあります。

このボランティア活動に皆さん是非来てみて下さい。そこで枝打ちをして、つる切りをして、子供たちがやった活動を見てあげてください。先日下見に行きましたら、昨年枝打ちをしてきれいになった松林の中に、粗大ゴミが捨ててありました。きれいになって入りやすくなった松林に粗大ゴミを捨てに行く。そういった大人もいるのも事実なのです。

これまで、クロマツ林の学習や保全活動を体験した子供達。そして、今日発表してくれた小学生や高校生、こういった子供達は大人になった時、松林にゴミを捨てるような人間には絶対にならないと私は思います。

住民参加の森づくり運動を広げること、それは非常に地道な活動だと思います。例えば、自治会の公園清掃にも参加しない人が、遠い場所の砂防林の保全活動に参加するとは思えない。

今日ここには、本当に意識の高い人が300人集まっているのだと思います。地道な活動を継続することにより、市民レベルで共有財産の松林を守っていく意識が少しずつ高まっていく。

私はそんな花咲かじいさんの役目をしていきたいと思っています。

(C 中島)

ありがとうございました。それでは、呉先生の方からお願いします。

(P 呉)

現在、世界的にも砂漠の緑化が課題となっている訳ですが、砂丘地の植林はまさに砂漠の緑化にも通じるものだと思います。そういった意味で、世界的な課題解決の成功例としての一角を担っており、大変誇るべきものだと思います。しかし、逆に考えるといったん木を切ってしまうと300年もかけて育て続けなければ、森は再生しないという教訓でもあるということです。

しかも、松くい虫などの被害もあり、今なおなかなか安定しない。私たちは、無分別に森林を破壊するという世界の状況に対してしっかりと発言し、庄内の松林だけではなく、世界の森林を守っていかなければいけないと思います。

世界中では、2秒ごとにサッカー場一面の広さの森林が消滅しているといわれています。私たちが一生懸命植林している間に、どんどん森がなくなっていくという大変な状況で、これではとても追いつきません。そういった中で、私たちは広葉樹に着目している訳です。クロマツ林も、放置しておけば、やがては広葉樹の森に移り変わっていくわけですから、自然の力をもう1回見直して、自然の力を最大限に利用する知恵を活用した方が良いのではないのでしょうか。

今回の地震でもそうですし、人の手で作られたものは、いつかは自然の力に負けてしまうのです。本当に海岸の最前線で、条件が厳しいところはクロマツ林を維持しなければだめですが、できる所であれば自然の力にまかせてみることを真剣に考えるべき時に来ていると思います。

さて、わたしも健康法で足湯をやっているのですが、万里の松原の足湯の話は大変いい情報を得ました。庄内で森林の活動をされている方々は、わりと仕事一筋で生真面目な方が多いのですが、活動の中にもっと遊びを取り入れていくと良いですね。公益大の学生の間では、カミネッコンという段ボール製の育苗ポットによる苗づくりが大人気です。紙のポットに思い思いの絵を描いたり、メッセージを書いたりします。遊び心を大切にして、子供たちや市民と一緒にカミネッコンで森づくりをし、楽しみながら、心豊かに頑張っていきたいと思っています。

とにかく、今まで広がった小学校の活動を、いかに公民館などを巻き込んで地域の活動に埋め戻していけるか、行政が中心となってやっている活動をいかに市民のものにしていけるかということがとても重要な課題で、これからさらに頑張っていきたいと思っています。

(C 中島)

ありがとうございました。今、それぞれの方から明日を語っていただきましたが、砂山さん何か付け足すことはないでしょうか？

(P 砂山)

簡単に集約して申し上げるとするなら、この庄内の砂防林は昔からあったということに慢性化して、我々はその素晴らしさを知っていない。実は先日、この17日にJTB山形支店のクリーンアップ作戦というボランティア活動がありました。それはお客様を募集しまして、バスに乗って庄内に来ていただいているわけです。もう4年間続いております。何をやるかといいますと、松林に入って枝打ちをしていただきます。この前も20名の方が山形からいらっしゃいましたが、その中の3名の方が4年間続けてきています。それから3年間続いている方も2、3名いました。山形の内陸からこの砂防林を守るためにやってきてくれているのです。

何故4年間も続けてきているのですかと聞くと、松林に入るだけでも気分がいいと、それと作業をやった後の達成感が他のボランティア活動では味わえない、こんな素晴らしいことを体験できるなんてことは有難いことだと答えてくださいました。

そういうことを意識していただいて、山形の内陸の方にもこの砂防林の素晴らしさを、この作業の快感を味わっていただいて、そしてバスで帰るときに、これは我々の会、クロマツの会にですが募金までしていただいて、枝打ちもしてもらって、こういうことを庄内以外の人がやってくれるということです。

そして今回、山形県の経済同友会で次代に残す山形景観賞に、庄内海岸砂防林が選ばれたわけです。庄内以外の方が庄内の海岸砂防林を高く評価しているということ意識し、我々は必ず明日へと繋いでいかなければならないということをお願いしたいと思います。

(C 中島)

ありがとうございました。だんだんと時間が迫ってきておりますが、本日秋田のほうからも来ていただいておりますので、代表の方に一言ご意見を承りたいのですがよろしいでしょうか。マイクもありますのでよろしくお願いします。

(会場 秋田県代表)

秋田県からきました斎藤です。今日は象潟の九十九島の松を守る会とか、我々由利の振興局から参りました。

我々も去年から、市民参加の松くい虫防除対策などをどうしようかということで考えておりました。山形県の庄内の皆さんのこれまでの取り組み等を参考にしながら、いろいろ活動をさせていただいております。本当に山形の皆様方は我々の先生であるということでございます。

それに小学校、中学校、高校と連携して色々活動しているあたりですね、松林を守る、松くい虫を防ぐということは、やはり地域の人々がですね、その地域のマツを大切にしようという気持ち、地域の財産を大切にしようという気持ちがないとどうしても守れない感じがいたします。これは梅津さんと同じ考えであります。そういう様な地域の人々が一緒にまとまって守っていこうというあきらめない気持ち、これが一番大事じゃないかと思っています。

そのため小さいときからいろいろこういう活動をする、そして大人になってまた帰って。こういう活動が、松林だけでなく、地域の文化なども守られていく。こういう活動を是非みなさんも継続して行って下さい、そして誇りに思っていていただきたいと思っております。

我々秋田県もみなさんに追随してやっていくつもりです。これからもご協力お願いしたいと思っております。以上でございます。

(C 中島)

ありがとうございました。エールを贈っていただきました。是非一緒に海岸林の活性化と再生が出来るように、共に活動できればと思っております。

最後になりますが時間が参りましたので閉めていきたいと思っております。この三角ピラミッドのような図は、私が授業の中で使っているやつなのですが、真ん中にある海岸林、これは砂防林と読み替えていただければいいのですが、これをやはり私たちや地域住民の方々や所有者。地域住民の方々の中には小学校、中学校、高校の方々も入ります。それから所有者の方にはもちろん森林組合の方々も入ると思っております。それに行政、これはもちろん県とか、国とかが入ってくると思っております。

こういう方々が海岸林を取りまいていくと、その上にまたNPOがあります。砂山さんから下の3つの方が柱という話もあったと思っておりますが、そういうのを繋いでいくのがNPOの大事な仕事になっていくのではと思っておりました。そしてまたこの外に、今日ご出席されているの方々など、直接携わらなくても心情的に応援していただけるという、そういう皆様方にとりまかれているのではないかと。そうでないとこの砂防林が守られていかないのではないかと、これを梅津さんは地域の宝とよんでいると思っておりますが、そういう形で守っていく必要があるかと思っております。

次の図は、先ほど言いましたNPOの役割として、これは私が勝手に考えたものですが5つ位の役割がありまして、これが今後のNPOに期待される場所ではないかという風に思っております。こういうことを念頭に置きながら、この庄内海岸のクロマツ林をたたえる会が益々発展されていかれることを願っております。

最後になりましたけれども、「砂防林に親しみ、砂防林に学び、砂防林を守ろう」という、標語を元に、私たちも勿論頑張りますが、是非皆様方からのご支持をよろしくお願い申し上げます、と最後に訴えまして、このパネルディスカッションを終わりたいと思っております。どうもご協力有難うございました。

(司会 高橋)

パネルディスカッションのみなさん大変有難うございました。そしてご苦労様でございました。

今日の目的は木を守る心を、少しでも大きな輪にするというのが目的でありますけれども、その思いが、今後我々NPOにふりかかってくるということで、責任の重さを実感しております。

明日を語る、未来を考えるということは反面、古きを訪ねるということにもつながると思っております。これまでの植林の苦闘の歴史を、色んな資料や写真を集めまして、梅津さんが大作をつくりましたのでここで上映をさせていただきたいと思っております。NHKのプロジェクトXばりになっておりまして、我々はプロジェクトKとよんでいます。

約15分間ですが、映像で綴る植林の歴史をご覧ください。